『娘巡礼記』

（高群逸枝著・堀場清子校訂　朝日新聞社　一九七九年）

館　かおる

近年の女性史ブームでとみにその名を目にすることが多くなったが、高群逸枝（たかむれいつえ）の名を知る人は、まださほど多くはないであろう。

高群逸枝は、明治二十七年火の国熊本に生まれた。後半生を前人未到の女性史研究に打ち込み、『母系制の研究』、『招婿婚の研究』の二大名著をはじめとする業績を後世の人々に残した。日本古代の婚姻形態を実証的に明らかにし、日本固有の醇風美俗であるとされてきた家父長的家族制度が、永久不変のものではなかったことを歴史的に跡づけたのである。三十年間門外不出、ひたすら刻苦勉励の毎日であった後半生の活動に比して、その前半生は、波乱に満ちたものであった。

逸枝は、長篇詩『日月の上に』、『放浪者の詩』を携えて詩人として世に出る。

汝洪水の上に座す
神エホバ
吾日月の上に座す

詩人逸枝

大胆で奔放で魅惑的なこの詩集は、詩人高群逸枝の評価を二分するに充分であった。一方で次第に社会問題・婦人問題へと開眼していった逸枝は、アナキズムの立場に立った評論家として、華々しい活動を繰り広げる。昭和三十九年に没するまでの七十年の生涯の、外面的には対照的にみえるこの前半生も後半生も、逸枝の内面に即してみるならば、貫ぬかれた一つの思想の軌跡に他ならなかった。

ここに紹介する『娘巡礼記』は、今から六十二年前に『九州日日新聞』に百五回にわたって連載され、関係者の誰もが予想しなかった程の反響を呼んだ、高群逸枝の処女執筆である。逸枝自身も生前再び見ることのなかった幻の処女作であった。

高群逸枝は、大正七年故郷熊本の専念寺をふり出しに、四国八十八ヵ所をめぐる約半年間の巡礼の旅に出た。時に満二十四歳の逸枝は、生涯の夫となった橋本憲三との愛に苦しみ、教職を辞して、窮乏と貧困の中にいた。この混迷状態から脱出し、一切の制約から放たれ自由ならんことを願って、逸枝は自己のすべてをこの巡礼行に託したのである。

往時の四国巡礼は、弘法大師信仰に結びつき、大師の聖地を巡るものであったが、業病にかかったり、失敗して家郷にいられなくなった悲運の人々の、おのれ自身を捨てに行く場所でもあった。逸枝の巡礼行は、自らをそうした位置に放下することにより、人間存在の根源を凝視しようとする求道の旅であった。

六月四日、逸枝は菅笠をかぶり、金剛杖をついて、白装束の巡礼姿で専念寺を旅立つ。固い決意とはうらはらに、人々の声が聞こえると羞かしさで真赤になり、ハンケチを顔にあてたまま逃げる様に通り過ぎる。志のお米を受けたものの、重くてぶらさげることもできず、投げ出して一散に逃げて来てしまう。大分では、逸枝を観音の化身と観じた篤信の伊東宮治翁が、逸枝守護のため図らずも同行することになった。

七月十四日にはいよいよ四国の八幡浜に上陸する。一番から八十八番までのお寺の、番数の多い方へと辿るのが「順打ち」、その反対が「逆打ち」だが、二人は登り道の険しい「逆打ち」をとって南下する。

逸枝は歩きながら想う。吾々が理想とすべき最高人格へ到達するには、第一に解放せられることである。あくどい装飾だの、汚垢だのをスッポリ脱いで、本然の生地に帰る事である。第二に愛することである。本然の生地の上に温かい美しい聖らかな輝きを添えることである。逸枝は、「一切愛」、「普遍愛」へと自己を昇華させようとする。しかしながら、現実に、「死の勝利に出てゐる乞食の群」を思わせる遍路衆と宿をともにし、業病に病む少女と心を通わせようとする時、彼女の希求はたえまない試練をうける。だが、底辺にある者、不幸な者、虐げられた者と共に生きよ

うとする逸枝の想いは、次第に虚飾を捨てた聖愛へと高まりをみせていく。

七月二日、二人は入野の海岸で野宿をする。海鳴りのする太平洋にむかって逸枝は光明真言を千回唱え、「わが心よ静なれ、安らかなれ。ありの儘の其まゝなれ」とほのぼのした喜びにひたる。

巡礼記には、逸枝の内面の苦悶ばかりではなく、「しらたま乙女」ぶりが随所に発揮されていてほほえましい。土佐湾の波静かな海を望んで、逸枝は地球の自転論を宮地翁に説法する。翁は、地球が廻るなら水桶の水はなぜひっくり返らぬかとなかなか納得しない。逸枝はむきになって唇をふるわせ、涙をながしながら懸命に説く。とうとう翁はもう降参しますと言い出すけれども、逸枝は、お爺さんは決して解っちゃいないのに平気で笑っている、なんとも憎らしい、残念だと本気で憤っている。

そしてきらめく才気。自己解放への階段を登り、自由の境地を得つつあった逸枝は、後年人々を魅了した詩人としての才気を垣間みせる。また遍路符りにあっては、民衆の信仰心と国家権力として立ち現われた警察との埋めようのない谷間に鋭い批判の眼をむけ、当時の風俗や社会の底辺を見事に写し出している。

逸枝たちは七月二十三日に土佐に入り、阿波をぬけて九月二十八日に瀬戸内海に出る。あこがれの瀬戸内海を見て、逸枝は一種の解脱状態と言える不思議な落ち着きを得るに到る。十月十八日には、四十四番菅生山大寳寺に詣で、本願成就となった。逸枝はこうして得た、静かな、真摯な、虔ましい聖(きよ)い感情と操持を、どんなことがあっても無くすまいと天に誓言する。十一月二十日にはようやく一人で熊本の専念寺に帰り着き、翌日の夕暮故郷の生家の前にたたずむ。

帰り来て先づ嬉しさに悲しさに入りもかねしか此所ぞ我が家

読者は、思想家高群逸枝の自己形成の原点がこの巡礼行にあることを知り、そしてこの『娘巡礼記』は、高群逸枝にとっての旅立ちの書に他ならないことを知るであろう。

本書の後訂者堀場清子氏に唱和して、私もまた祈ろう。「あらたな読者の魂をたずねて、八十八ヵ所をめぐる巡礼娘の旅よ、さきくあれ」と。なお、高群逸枝の自伝『火の国の女の日記』上・下(講談社文庫)もあわせて読まれることをおすすめする。(お茶の水女子大学・女性文化資料館)